

日傘 順子

2013年12月1日(日)午後、NPO法人 漱石山房主催の「新宿の漱石 師走講演会～文豪漱石の軌跡とその文学の神髄～」が、新宿区立四谷区民ホールで開催された。

プログラムは漱石山房理事長：近藤祐司氏の開会挨拶—朝日新聞記者：牧村健一郎氏の講演—(休憩)—東京外国語大学大学院総合国際研究院教授：柴田勝二氏の講演という構成で、シンプルな司会で進行し、「講演を聴いた」という充足感があった。

まず牧村氏の講演『漱石と温泉』であるが、「温泉」の利用は、傷病平癒促進のための「医薬的効用」が目的、乗じて長期にわたる「転地療養」—それから元来は農繁期の疲れを癒すための楽しみであったものが「一般の人が訪れる観光地」へ発展したようだ。そこは実用的場所から娯楽の別天地となり、怪しい恋が発展しそうなところに文藝が生まれたという。徳富蘆花の『不如帰』、尾崎紅葉の『金色夜叉』などが代表的なものだそうだ。漱石作品では怪しい恋というよりも、温泉地で謎めいた女性との邂逅がある。『坊っちゃん』では仕事で赴任した松山の道後温泉でマドンナに出会う。『草枕』では旅の宿泊先である小天温泉で那美さんに出会う。いずれもどこか謎めいた女性である。そして『明暗』では津田は痔の手術後の療養のために、過去の恋人である清子は流産後の静養のために、同じ温泉で出会うようにセッティングされる。私はここで自分の中で新たに気づいた。『明暗』の温泉は、互いの過去の恋の傷を癒す「疾病治癒目的」のための温泉で、入り組んだ廊下は少しずつ過去を解く場所なのだ。

そして話は作品から漱石自身の温泉体験へと移る。鏡子夫人の自殺未遂の原因は『草枕』の宿の那美さんのモデル：前田卓^{つな}にあるのではないかという説もある。勿論真偽のほどは定かではない。また漱石は友人である中村是公満鉄総裁の招待で満州・朝鮮を旅行し、日露戦争に関わる地を見て歩くが、それを著した紀行『満韓ところどころ』によれば、現地でもいくつかの温泉地を訪ねている。牧村氏はその温泉にも行ったそうだ。かつての日本兵の傷を癒すための袖鶴城温泉とロシア兵の傷を癒すための湯嵐^{とうらん}温泉。そこで漱石は崖から降りてきた女とすれ違う、湯から室へ戻る途中で紫袴の女を見かける、という温泉地ならでは「謎めいた女」との邂逅を体験する。

またその旅行中、漱石の胃の具合はよくなかったが、日本では松根東洋城が宮様に同行して修善寺温泉へ行くから、そこで療養してはどうかと漱石を誘った。しかし行った時期が悪かった。災害をもたらした雨続きの低気圧真っ只中で、漱石は大吐血を起こし生死の境をさまよう。満韓の凸凹地でトロッコに揺られ、湿度が倍増した温泉地で静養する。いずれも相当胃に悪い。善行の人にも本人にも気の毒な話であった。

次の柴田勝二教授の講演は『漱石と異文化—(中国)と(イギリス)の間で』というタイトルであった。ここで興味深かったのは、漢学に親しんだ漱石は「自分は日本人である意識が欠如しており、文化的には東洋人である」と気付いたということ。その中で東洋人と日本人が折り合った時点から作家活動が始まったということ。漱石における漢文脈は①脱俗②功利主義批判の表現手法であること。漱石がアジア蔑視的と誤解されるのは、その視点が庶民的なものではなく国家的なものであったこと。ロマンティックな反面、現実を批判的に眺める漱石の二面性、「個性に優劣はつけられないから異文化評価可能」の域に達した漱石、など実に学術的な講演であった。(2013.12.7)